

## 2. シンポジウム 「土木の原点を考える ～土木の力が日本を救う～」

### ■ パネリスト



阪田 憲次 氏  
土木学会 会長



江川 達也 氏  
漫画家



中野 剛志 氏  
京都大学 助教

### ■ コーディネーター



藤井 聡 氏  
京都大学 教授

藤井——本シンポジウムでは、「土木の原点」について改めて考えてみたいと思います。このシンポジウムは「土木の日」と同時に、土木学会の「100周年記念事業」としても位置づけられるものです。

当方からは、まず「土木とは何か」についてお話ししたいと思います。土木は英語でcivil engineering と言います。civil というのは文明という意味です。つまり無秩序でなく、秩序だっていて、平和で、豊かで、いがみ合うこともなく、楽しくて、立派で、レベルの高い文化が成立していて、緑もあって、きれいで、ユートピアみたいな世界、これが「文明」という言葉が持つイメージで、これをつくろうとするのがcivil engineeringです。

日本語では、土木とは「築土構木」のことです。これは淮南子<sup>えなんじ</sup>という中国の古典哲学書の中の言葉です。「聖人」が赤貧にあえぐ民のために、土を積んで木を組んであげたという、これが築土構木の四字熟語の由来です。土を積んで木を組んだ結果、人びとが安心して暮らせるようになりました、ということが淮南子の中で出てきます。つまり、立派な人びと(聖人)による、庶民を幸せにするための営み、これが「土木」です。

ところで、一般の方は土木と言えばおそらく、ダムとか道路とか、とにかく大きなものをつくっている、ということ以外はよくわからず、何やら否定的なイメージでとらえることも少なくないと思います。一方で、「土木」こそバブル以降後凋落し続ける日本を救う唯一の道なのだ、と指摘されることもあります。つまり、土木には、さまざまなイメージや議論があるわけです。このシンポジウムでは、そんなことをすべてひっくるめたうえで、土木にほとんど直接触れたことなかった2人の文化人と、土木に長年取り組んでこられた土木学会の第98代会長と一緒に、そもそも土木とは一体何なのか、原点を改めて振り返ってみようというものです。

### 今の日本では、土木はほとんど顧みられなくなった。でもその原点は、総合性と倫理性なのだ。

阪田——昨年の政権交代で「コンクリートから人へ」という言葉が出てまいりました。実際、不幸なことに、ある程度社会基盤が整い

ますと、その値打ちがだんだん忘れられていきます。たとえば、去年、台風18号という台風が上陸しました。ちょうど50年前に、それと同規模の伊勢湾台風がきて、5,098名の方が亡くなっています。一方、台風18号でお亡くなりになったのは5名でした。この1000倍以上にも及ぶ差は、言うまでもなく治水についてのインフラの差です。しかし、そんなことはどこの新聞にも何にも書いていません。

サンディエゴ市のダムが最近36mのかさ上げ工事をするということで、先日行ってまいりました。この工事で水の量が1.9億m増えます。これはサンディエゴ120万の市民の1年分の水ですが、将来そういう水量が必要になる時代が必ずくると想定し、整備しているそうです。大変感銘を受けた一方で、日本ではハッ場ダムはお金がかかるから不要という議論があることを思い起こし、残念に思った次第です。

今、「ホリスティックアプローチ」の必要性が科学論でよく言われています。これは物事を総合的に見なさいということです。しかし、土木学会初代会長の古市公威はもう100年前にそのことの必要性を主張し、「将に将たる人を要する場合は、土木において最も多し」と、言っていたわけです。これは土木の原点の一つです。それから、もう一つ、1938年に第23代会長青山士<sup>あきら</sup>が、土木技術者の信条および実践要項というものを発表しています。これは、倫理規定あるいは行動規範と言われるものですね。それは土木技術者の使命の確認であり、品位の向上、権威の保持の確認でした。そういう原点に戻ったうえで、もう一度この100年を総括して、やはり、次の展望を開いていく必要があると思います。

### 土木を振り返るなら、100年じゃ足りない。500年くらい振り返った方がいい。

江川——会長さんは、土木学会には100年の歴史があるとお話されましたが、素人ながら思うことは、いっそのこと500年くらい振り返ったほうがいいんじゃないかということです。ペリーの黒船がやってきて、日本は文明開化したと世間では言われていますよね。でも日本では江戸時代にもうすでに、治水もすごいよくできていたと思います。自分は江戸時代にできた三田用水<sup>みつた</sup>(玉川上水から分水された上水)マニアですが、その頃の玉川上水も、4か月ぐらいですぐつくっています。短期間で、しかも地形を非常に有効に活用して用水をつくる技術っていうのは、明治以降よりはるかに進んでいたのではないかと思います。実際、日本の戦国時代末期に行われた、新田開発や治水などは現在も使われているものが多い。コンクリートだと、100年持たないんですけど、手掘りをつくって、いまだに田んぼに水を流しているような用水などもある。だから、100年の土木を振り返る前に、500年の土木を振り返られたらどうかと、素人ながら提案したいと思います。「コンクリートから人へ」と言うよりも、「コンクリートから土」というか、「コンクリートより



も石で」つくったほうがいいんじゃないかな。

あと、国土防衛などの考えからは、地下都市をつくったほうがいいんじゃないかと思います。もしかしたら地下が新しい土木が開ける道というようにも感じます。それで地下に近代的なものをつくって、地上は江戸時代に戻すという、そんな感じの未来図が、俺の頭の中ではもう出来上がっています(笑)。

やっぱり国家っていうのは、そんなふうには「目標」をつくらないと、みんなついてこない。だからやっぱり何らかの「目標」を描いてそれをビジュアル化して、「こういうのはどうだ」というように提案をしたらいいんじゃないかと思います。

### 土木批判の背景には、「反国家」の思想があった。その結果、日本は全然経済成長できなくなった。

中野——土木というものは国家と非常に密接に関係をしている。その土木が長いことたたかれば続けたということは、すなわち「国家がいらない」と言われ続けていた、ということですね。つまり、土木が叩かれる背景には、「反国家的」とでもいうような風潮があったんじゃないかと思います。

ところでインフラの老朽化問題は、資本主義経済できわめて重大な問題です。インフラを更新する時代がまさに今、きています。こういう大更新時代は、文明的には人類史上初めてです。だから欧米はもう一回それでインフラ投資をやって、更新しようとしている。この12年間でイギリスは公共投資を約2.8倍、アメリカでは2倍に増やした。しかし、その一方で、日本は「半分」にしているんです。

すごいですよね?

こんなことをやっておいて、日本は世界から乗り遅れているのだ、地位が下がっているのだと言う。そんなことは当たり前です。これで地位が下がらなかつたらおかしいですよ。実際、日本のGDPは、私が(旧通産省に)入省した1996年から、まったく成長していません。しかし、日本以外の諸外国は成長し続けています。つまり、私が入省してからまったく成長してないということは、私が役所で学んだ経済政策論は全部無駄だったってことなんです(笑)。





にもかかわらず鳩山政権はその公共事業費をさらに削減しましたので、だからさらなる政権交代が…ということになるわけです…この辺にいたします。ありがとうございました。

### 民のために、皆できちんと、「土木と国家」を考えるべし。

藤井——以上、パネリストのみなさんから実に多様な論点をご発言いただきましたが、ここからパネルディスカッションをいたしたいと思います(以下、抜粋)。

阪田——やはり私が印象を受けたのは、江川さんも中野さんも、「国家」や「国」ということについて述べられました。そもそも建設業は、「国」と非常に密接に関係している。たとえば、アメリカのフーバーダムに行ったときに、バイパスのための橋をつくっていたのですが、それが「テロ対策」らしいのです。ダムがテロの対象になるからということで、ダムの上は通さないということなのです。



江川——軍隊の話でいうと、ドイツが鉄道インフラをつくったとき、それはもう完璧に軍隊の管轄で、鉄道の上のほうの役人がみんな軍人だったといえます。すべてが軍事的な発想のもとに、鉄道を敷設したわけです。

阪田——基本的に国家と土木というのは非常に密接であるということ、もうちょっと理解する必要がある。日本という国にはいろいろと特殊な点がある。河川は急峻で、地震も多い。そして、自然も多い。それを踏まえて、インフラ整備をしないといけないと思います。

江川——ただ、やっぱり、ビジョンがないですよ、日本には。

藤井——たとえば江川さんのおっしゃった、地上と地下を分離するというお話の中の、地上は江戸時代で地下は近代的なもの、というのも一つのビジョンですね。いずれにしても、自然と人間活動との折り合いはどうしても、土木の中では不可欠な議論ですね。

阪田——自然がいいですねとか、そういうことを言う人はたくさんいます。自然だけでいけるんだったらそれでもいいんです。でも、それではいけないですから、そこにコンクリートとか鉄とかいうものが



必要になってきたんですね。

中野——ほんとおっしゃるとおりです。特に、「戦後敗戦直後」は、文字通り「急場」だった。で、その「急場」で1967年に日本が世界第2位のGDPになる。だから1960年代の前半くらいまでは実際急場だった。そして、しばらくすると石油危機が起きて、また急場になっちゃった。だから、本当はバブルのように余裕があるときに、長い目でものをつくるような発想になるべきだったんです。でも、そのときに遊んじゃった。

やはりそれは、国家ビジョンがないことが原因だったとも言えます。

だから今、自然主義という、「アンチ国家」といったイメージと結びついてしまっている。つまり、俗に言う左翼的な心情と自然主義環境主義が結びついている。

江川——それは、やっぱり戦後の教育にあると思います。戦争に負けたから戦前のすべてを抹消して、すべてが悪かった、ということにしたんじゃないかと思います。

中野——土木と戦後教育の問題は重要な議論ですが、それとは別に、もう一つ、土木を考えるうえで重要な点があります。土木は今、大変な批判を受けている。それに対して土木のみな



んは「悪いところはあった、そこは直していく、あとは国民への説明が必要だ」ということをおっしゃる。まったくその通りですが、あえて部外者として申し上げると、事態はもっと緊迫しているんです。実を言うと、批判している方は「正論」じゃなくて、「邪説」をもてあそんでテロを仕掛けているようなものです。「国家に対するアンチ」として「土木を批判」しているに過ぎないわけです。土木の世界も「えりを正さないといけないところ」はあろうかと思いますが、向こうの「えり」は乱れ切っているわけですよ(笑)。

藤井——さて、この辺で全体をまとめさせていただきたいと思います。

土木学会100周年記念事業の重要なポイントの一つが、これから社会に開いていこうじゃないかという点でした。そういう意味で、今回、江川先生と中野先生にご登壇いただき、非常に開かれた議論をいただけたものと思います。それは今までの土木の内部ではなかったような議論で、しかも、本当の意味での「経世済民」(世をおさめ、民をすくう)につながる議論だったと感じております。今日はありがとうございました。

